

オートリゾート ネットワークからみた 北海道観光と道路

宮武 清志

社団法人北海道オートリゾート
ネットワーク協会事務局長



オートリゾートネットワーク構想とは？

『オートリゾートネットワーク構想』は、本格的なオートキャンプ場を核とする複合的なレクリエーションエリアである『オートリゾート』を全道的に整備し、道路・情報ネットワークで結ぶことにより、家族で自動車旅行をする際にも安全・快適に滞在でき、かつ周遊性の高い新しいリゾートづくりを目指したものです。第5期北海道総合開発計画（昭和63～平成9年度）で本構想の推進が明記され、平成4年に第1号となるキャンプ場が供用されて以来、整備は進み、17年度には46カ所が供用されるまでになりました。

総合開発の成果：オートリゾートネットワーク

こうしたオートキャンプ場の整備とネットワーク化は全国的にも進められました。例えば、旧建

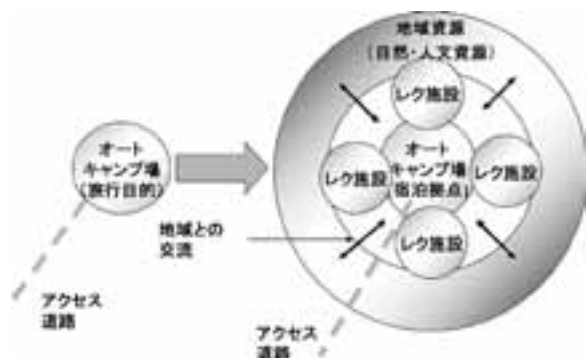


図1 オートキャンプ場からオートリゾートへ

設省の「都市公園におけるオートキャンプ場ネットワーク」や旧運輸省の「オートビレッジ」、環境省の「エコロジーキャンプ」などで、それぞれが所管する補助事業等を用いて整備が進められました。しかし、こうした整備手法はあくまでも整備側の事情であって、利用者からするとどの事業で整備されたかは問題ではなく、できるだけ多くのキャンプ場を早く利用できることが重要なのです。

北海道では北海道開発庁が中心になり、北海道開発局、北海道、日本道路公団、北海道警察本部からなる「オートリゾートネットワーク行政連絡会議」が設置され、基盤整備におけるサポートや事業間調整を行ってきました。その結果、オートキャンプ場の整備にあたっては公園・河川・農業・森林等あらゆる補助事業起債等が活用され、短期間に質の高いオートキャンプ場が整備されていったのです。こうした多様な事業を駆使できたのも北海道開発の中で培われてきた総合開発方式の基盤があったからこそと考えています。

さらに、オートキャンプ場供用後の利用促進や運営品質の維持等を図っていくため、平成5年には関係民間団体、企業、キャンプ場整備・運営主体の市町村等が参加し、「社団法人北海道オートリゾートネットワーク協会」が設立され、基盤整備を主に行政が担当、運営品質やPRを同協会が担当する推進体制ができました。

オートキャンプ場とは？

“オートキャンプ場”という言葉は実は和製英語で、欧米では単にキャンプ場、RV（レクリエーション用自動車）パーク等と呼ばれています。本協会では、以下の3点をオートキャンプ場の基本的要件としています。

- ①車のテントサイトまでの乗り入れが可能なこと
- ②安全性・静粛性・清潔性が確保されていること



図2 オートリゾートネットワークの推進体制

③24時間の運営体制により緊急時対応が迅速であること

また、オートキャンプ場そのものは以下の3つの機能で構成されています。

- ①宿泊機能（テントサイト、キャンピングカーサイト、コテージ・キャビン等）
- ②衛生機能（水洗トイレ、ランドリー、風呂等）
- ③サービス機能（センターハウス、売店、レンタル用品、遊具等）

オートキャンプ場利用の現状と運営の課題

利用の特徴としては、欧米におけるキャンピングカー等を利用した長期滞在型・広域周遊型とは異なり、ファミリーの週末・夏休み利用、宿泊形態もテントやコテージ等の利用が主流です。

そのため、運営面では利用が週末・夏休みに集中し、経営資源の効率的な配分が困難なこと、都市から遠隔地ほど利用が低迷しており、いわゆるリゾート型キャンプ場が育っていないこと、市町村等による公共営が大半のため弾力的な運営が困難なことなどが課題となっています。

こうしたことから、今後は平日利用グループ（シニア層、学校、地域住民等）が利用しやすいシステムづくりや長期滞在・広域周遊旅行者が利用しやすいシステムづくり、また多様な利用者ニーズに対応できるように、地域資源との連携や活用による個性的で多様なレクリエーションメニューの提供など、創意工夫にあふれたキャンプ場運営をめざしていくことが必要です。

キャンプ場と案内所は観光のインフラ

キャンプ先進地と言われる欧米、例えば、米国によく見られる高速道路IC周辺に立地する周遊型キャンプ場、欧州のリゾート地に多く見られる長期滞在型キャンプ場などはキャンピングカーや自家用車を使った旅行をする際の最も安価な公共

的宿泊施設として明確に位置づけられています。そのため、欧米では小さな町や村には必ず案内所（iセンター）とともにキャンプ場の案内標識が設置されています。この両者はいわば観光における土台のようなもので、観光地を底辺で支えているものです。

観光におけるキャンプ場の位置づけと道路

観光行動は「遊ぶ・移動する・休む」の3要素で構成されていると言われていますが、それぞれが安全性と快適性そして選択性に優れていることが必要です。

観光全体の中でキャンプ場は主に“休む(宿泊)”機能を担っていますが、キャンプ場利用者はキャンプだけが目的ではありません。居住地からの移動や沿道の様々な観光施設への立ち寄り、あるいはキャンプ場周辺の川や森で遊ぶこともあります。すなわち、キャンプ場単独では宿泊施設としてもまたレクリエーション施設としても成立しません。キャンプ場も含めた「遊ぶ・移動する・休む」機能が連携していなければ観光というものには成り立たないのです。これが「観光は地域開発の総仕上げ」と言われる所以です。すなわち観光とは地域に内在する資源としてのヒト・モノ・カネ・情報を総合的な観点からマネジメントしていくことであるとも言えるのです。

おわりに

北海道には自然・景観を始めとした文化や歴史など豊かな地域資源が豊富に存在し、アジア地域でも有数の観光地域を形成しています。今後はこうした北海道の優位性を活かした地域戦略としての観光振興の推進が必要です。

そのためには100年を超える北海道開発でストックをされてきた社会資本や豊富な観光資源を効果的にネットワーク化するなど、観光振興に不可欠な“総合的”な視点を常に持ちながら進めていくことが必要ではないでしょうか。



欧米では小さな町村にも必ずあるキャンプと案内所の看板

profile

宮武 清志 みやたけ きよし

1953年室蘭市生まれ。北海道大学理学部物理学科卒業。'89～'98年まで(社)北海道開発技術センター勤務。'99年～2002年まで札幌国際大学勤務。'03年から現職。専門は地域計画・観光振興計画。